

タピオカ(マン
ジョーカ澱粉)
カフェ

タピオカはちょうど昆布茶に入るおかきのような体裁をしており、コーヒーに溶かしながら食す。最も苦しい一食。

ファリーナ
カメ煮
カメ焼

カメはアクが強いので一度熱湯に入れアク抜き。あとは魚と同じく塩水で煮く。焼く方はカメの背の甲らを火の上に置き、甲らの内についている肉を焼く。

焼ピラニア
カメ卵

〔部落定着中〕

イモ粥
さとうきび
バナナ
ポタージュ

ビスケット
インスタントコーヒー
さつまいも
卵

バク
ファリーナ

(津田)

医 療

学生だけの隊として最大の弱点が医療班である。その対策として、医学ハンドブック程度の知識と、実際に使用する各薬品の近視眼的知識を吸収したのである。しかし、そのような貧弱なものでは、本にのっていない、また経験もしたことのない症状には手のほどしようがなく、逆に粗末な医療知識をこねまわし、悪い結果を引き起こすことも考えられる。

隊員の病気 まず報告しなければならぬことは、津田隊員(医療係)が調査旅行(9月29日～12月2日)中に急性リュウマチ炎(後の病院の診察による)にかかったというものである。

旅行のはじまる前から、全身のだるさと、肩ひざ等にぎこちなさを感じていたのであるが、船での旅行が始まって1週間、首、背中の筋肉、股関節に痛みを覚え、2週間で痛みはヒジ、手

首、指の関節におよび、ヒザは腫れあがった。この時点で体を動かすことは極めて困難になる。昼は酷暑のカヌーの上で、夜はハンモックの中でじっとしていてもうずくこともあった。それまでに手持りの鎮痛剤、アリナミン、クロロキン、抗生物質をあれこれと手当たり次第に服用するのであるが、いっこうに目に見えた効果はあがらなかった。この時、慢性の下痢により、身体もかなり衰弱し効能成分の吸収力も劣っていたと思われる。

ここで悔まれたのが注射技術を知らないことであつた。ペニシリンを2回ほど射ったのであるが身についていないということは悲しく、常用できないし、またひとりではとてもできなかった。

結局、前後3カ月、うち1週間の歩行困難のうちに一応痛みはひいたのである。

部落からマナウスへ帰ってから（この時点で発病2カ月）アマゾン大学附属の病院の診察を受け、それによると連鎖球菌によるものであるということで、マナウス近辺には多いのである。（発病は出発前のマナウスにおいてであるというまことに皮肉な結果となった）

対インディオ投薬 これ以上に、医療係として最も留意すべきことは、対インディオ療法である。FUNAIも大量に薬品だけは部落にもら込むのであるが、職員自身もあまりその方面には明るくなく、おのずと「ドクトール」のふれこみの当方にインディオの治療を頼るのである。

インディオに対する薬物投下は、薬品に対する抵抗力をもたないので過激なものは直感で小児分量で投与を行なった。

一度、部落への往路で1人のインディオが血便のまざる下痢に見まわれ、エンテロビオフォルム、抗生物質や解熱剤（フェナセチン）を成人並みに与え、余計に症状を悪化させたことがあった。（もちろん、ともに胃腸薬を与えたが）下痢や風邪の場合でも、目に見えて効果を発するということはほとんどなく、内服薬の投与には豊富な知識とデリケートな神経が必要と痛感した。

ただ外用薬は抜群の効力を発揮し、またその

医療品リスト

鎮痛剤	新グレラン	100錠	虫さされあとをかいて、化膿させては痛む——ということを繰り返していたので、よく使用した。インディオへの投与は避けた。
感冒薬	ルル・ゴールド	150錠	非ビリン系。風邪はよくかかり日本の冬季と同様と考えてよい。数量的には、はるかに不足。もっぱらインディオに対して使用した。
	強力ベンザ	200錠	我われがおもに使用。ビリン系である。
総合ビタミン剤	パンビタン ペレー	500錠	本来は小児用のものであるが、インディオらの「薬への欲求」を満たすためには便利なものであった。ただし、これはすべての錠剤にいえることであるが、防湿には2重3重に留意しなければ、湿気ですぐ変質する。
活性ビタミン剤	アリナミンA25	300錠	多量に持っていて損はしない。今回のように、長期の病人を出した場合、体力の回復、維持にきわめて有効
	ビオタミゴールド	200錠	
抗生物質	クロラムフェニ コール錠	300錠	数量的には、結果的にじゃっかん足りない程度だったが、なるべく使用しないのが賢明だろう。専門家と相談して各種の抗生物質をそろえるのが好ましい。なお、抗生物質はブラジルにおいて極めて簡単に、かつ安価に入手できる。

抗マラリア剤	レゾヒン	500錠	全員、予防に定量をのんでいたのに、幸いどれもマラリアにはならなかった。
抗生物質軟膏	クロロマイセチン軟膏	100g	インディオに多い化膿に抜群の効果を発揮する。とうてい足りなかった。これもまたマナウスでは安価。

デモンストレーションの効果も大きなものがあった。彼らは皮膚病および虫さされ（主にブユ）から、あるいは切り傷からの化膿症が多く、赤チンは塗るだけで喜ばれ、抗生物質軟膏は、非常に効果的であった。

内服薬とりわけピリン系、クロロキン、抗生物質のインディオに対する使用は、できる限り制限したつもりである。医者ならともかく素人は慎重に行なうべきである。

最後に医学的知識の無知を思い知らされ、今後、医療係と名のつく人間は、真剣にこの点を熟慮しなければならないと痛感した。

以下に、使用したおもな薬品のリストを掲げて、じゃっかんの考察を加えてみた。ただし数量的にはFUNAIも大量に持ち込み、共同使

用という形をとったので、実際には、ほとんど充足していたが、ここには我われが準備した分だけを記す。

なお、この他に外用薬のマーキュロクロム、ヨードチンキ、オキシドール、アルコールなどは現地で各1ℓ以上購入しなければならない。外用薬はあまりに少なすぎたことを反省する。

なお、マナウスでの在所一日本人学生寮にはアマゾンズ大学医学部の学生が9名が入居しており、医療計画の面、あるいは購入の面に多大な協力をうけ、また隊員の病気の治療にまで奔走していただき、この項を借りて謝意をあらわします。

（津田）

撮 影

基本的な考え方 我われは当初よりフィールド・ワークで占め、写真の重要さは充分考えていたし、また討論してきた。特にメンバー的に弱少であったので、写真や録音によってカバーしようと考えた。しかし、これが大きくくずれた。写真の担当者が退部し、メンバーは3名になり、この重要なポジションをどうするかで大いに悩んだのである。そこで、どういうわけか私に役が回ってきた。こうなったら仕方ない

と思い、写真には自信のない私であったが、とにかくピンボケ写真を撮らないということを念頭においた。そして常に3台のカメラを持ち歩き、カラーズライドと白黒をセットして、一台で失敗しても他のカメラがそれを補うという方式をとった。それができなければ2台のカメラで同じ写真を撮るか、1台のカメラで何枚も同じものを撮るかということを試みた。

アプローチのさいのカメラ アプローチは